

特集 図書館と私

シリーズ 研究の周縁より

書物の敵¹⁾

さあ 皆で声をあげよう
さようなら 蠹魚たち
図書館の本が今まさに朽ちんとしている
図書館は大学の頭脳
旧制高等学校関係の図書は文化遺産
一刻も早く 手立てを
ほら 蠹魚が
ここにも
あそこにも

早稲田大学図書館長を務めた市島謙吉春城（1860～1944）は愛書家・読書家であり、印章や篆刻にも造詣が深い。豊富な学識を有し随筆を多く上梓した。『市島春城古書談叢』（青裳堂書店）収載文は達文である。また彼は多くの印章、篆刻を収蔵した。彼の蒐集した印は、現在新潟県立図書館と早稲田大学に収蔵される。私はかつて一文を草しその収蔵印の価値に言及した²⁾。春城は図書の大切さや篆刻の素晴らしさについて述べる。

「図書漁りの業は全く故人の展墓のやうなもの」
（「名家私印の蒐集に就いて」）

「故人の私印は其の人の位牌のやうなもの」（同上）

「図書の敵は種々様々あって或は全部を滅し、或は其面目を害しあたら貴重のものをメチャクチャにすることは、図書に対する冒瀆であり罪過である。其の罪過の最も重きものは戦争や革命或は忌諱などに由り、わざと幾万の図書を束ねて劫火に附することであるが、実は図書に対しての無理解から其取扱を粗略にして、蠹魚の餌にすることを省みず、或は雨露に侵さるゝを保護することをせ

神野雄二（号 大光）

ず、動もすれば図書を崩して廁紙となし、或は焚料に供するなど、其の程度は小なれども、其の罪過たるや同一である。」（「書物の敵」）

さて私の専門は書道、中でも篆書・篆刻の作品制作と印人の研究である。篆刻は、石、木、金属、粘土に文字や画を美的に刻し版にする芸術である。篆書体を用いることが多いがそれに限らない。実用の判子とは篆刻を雅印と称して区別する。

篆刻は書の一分野である。

中国では、明時代に良質で柔らかい石印材が発見され、文人達が篆書を書き刻し、書画に押した。また篆刻自体が鑑賞されるようになった。中国の印である古璽印、秦漢印、西泠八家、完白、缶廬、白石は素晴らしい。

日本でも、古くは大和古印があり、江戸時代以降中国から篆刻が伝えられ流行伝播していった。芙蓉、大雅、蔵六、初世・二世蘭臺、寒山・正平、鉄斎、魯山人、一政、憲吉と篆刻の名家・文人が綺羅星のように排出した。

篆刻は伝統に追う所が多いだけに、時にそれを破壊する行為が必要だろう。技術のみが優先される芸術は死ぬ。生命が、生命のみがいる。創造的破壊。

模索を重ね、昨年末2005年12月に一つの作品を作った。甲骨文の拓影に魂を奪われてのこと³⁾。実験作である。（『楽篆』28号、2006.2、三圭社）

また、今回私的篆刻芸術論を書き、作品を制作した。すべて2006年作である。

これは紛れもない今の私である。

篆刻の神秘

まだ見ぬ世界への憧憬

新しい篆刻

篆刻における抽象表現主義

なぜ篆刻か なぜ書か なぜ文字か なぜ□か

なぜ○か なぜ赤か なぜ黒か なぜ筆か

なぜ線か

篆刻は天刻である

天の声を刻す—つまり天刻—龍印 (D・S)

動く天刻 (M・S)

亀裂や欠けに得もいえぬ限りない美を感じる

石は宇宙の欠片

古代人は 石斧や鏃を石を砕いて作った

縄文土器の欠片

志野茶碗の陶片

楽茶碗 光悦の罅と欠け

割れ目 欠けの美学

白洲正子は言う

「あまりに完璧なものはいいにきまっているが、完璧すぎると却って情緒に欠ける」(「骨董との付き合い」)

甲骨文の拓影に魅入られた

線と外形の面白さ

甲骨は完品少なく 不完全の美だ

その線は神線

篠田桃紅は言う

「その古い甲骨のキズみたいな稚拙な線には、遠い代からつづく人間の魂が宿っている」(「書と私」)

桃紅の線

円空の木彫り彫刻の鉦彫りの跡

光太郎の書の線

志功の板画の線

レ・フオンタナの「空間概念」の切られた線と空間

触れば血が吹き出る

凄みのある線

これこそ祈り

これこそ叫び

これこそ命

偽りのない世界

無心の美

無作のころ

ヒエログリフ 楔形文字 甲骨文

刻画符号 陶文

昨今の印材は亀裂が多い

ならばそれを生かしてみよう

叩き割る

無造作なかたち

天刻 龍印

非文字天刻

全く新しい印の美の創出だ

篆刻の神秘

篆刻革命

今一度

古代文字に目を向けよう

己が

心

開いて

畢竟

人間か

さて、この篆刻の制作過程を明らかにしたい。まず、印材を叩き割る。それに篆刻する。もしくは、文字を刻した後叩き割る。方形の形が全く違った形となる。不定形。ここに想像が沸き立たせられる。そして組み合わせる。それを、印泥と日本画や・版画で使用する朱の顔彩で和紙や版画紙に押した。

これまでの、古来の篆刻とは全く相違する制作方法。私はこれを「天刻」、動く篆刻 (M・S)、「龍印」(D・S) と名付ける。

本誌に掲載した、①「作品05-1」は、文字「丙戌」を刻し、その石を叩き割ったものである。(M・S) 処女作。微妙なバランスで成り立つ人間世界を表現した。②「作品06-1」は2作目。印文は「蠹魚」。叩き割った全く別の石材の組み合わせ。③「作品06-2」は3作目。非文字作品。文字を刻さない天刻。篆刻における抽象表現。甲骨文字前の刻画符号や陶文がヒントだ。刻線美の究極といえる。④「作品06-3」は4作目、非文字作品。ただ線の重なり面白さを追求。刻した印面を指で写し取る。⑤「作品06-4」は5作目。叩き割った面に刻字したもの。印文は「父母」。父母への感謝の思い。

今後の夢一つ。この極小印、方寸の世界を拡大印刷した極大印の制作。朱と墨で。人間の生の歓喜を象徴する太陽と、死の歓喜を象徴する月のイメージで。

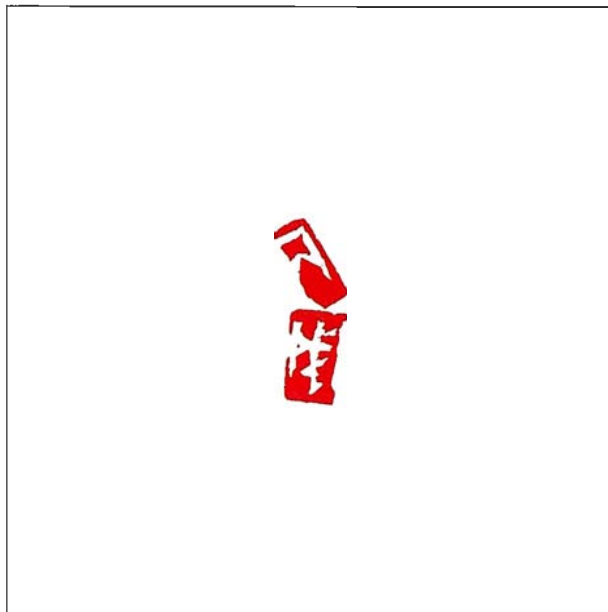
古典との真摯な対話。
生きている実感。
ここからしか、作品は生まれない。

熊本大学図書館から
この忌まわしき虫たちが絶滅することを祈りたい
さようなら
蠹魚たち

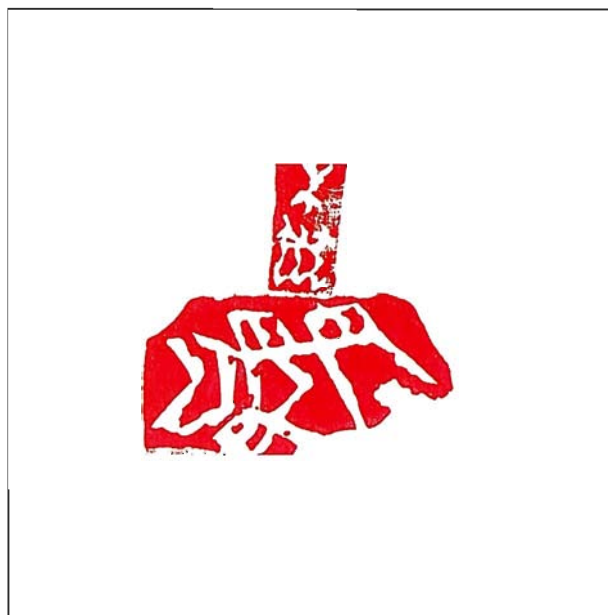
〔註〕

- 1) 庄司浅水著『書物の敵』(ブックドム社 1930.11)
本稿タイトルは、同著のタイトルに倣った。
- 2) 神野雄二「市島春城の印章」(『修美』No. 44 修美社 1993.10)
- 3) 小林石寿編『展大甲骨文字精華』(木耳社 1985.6)

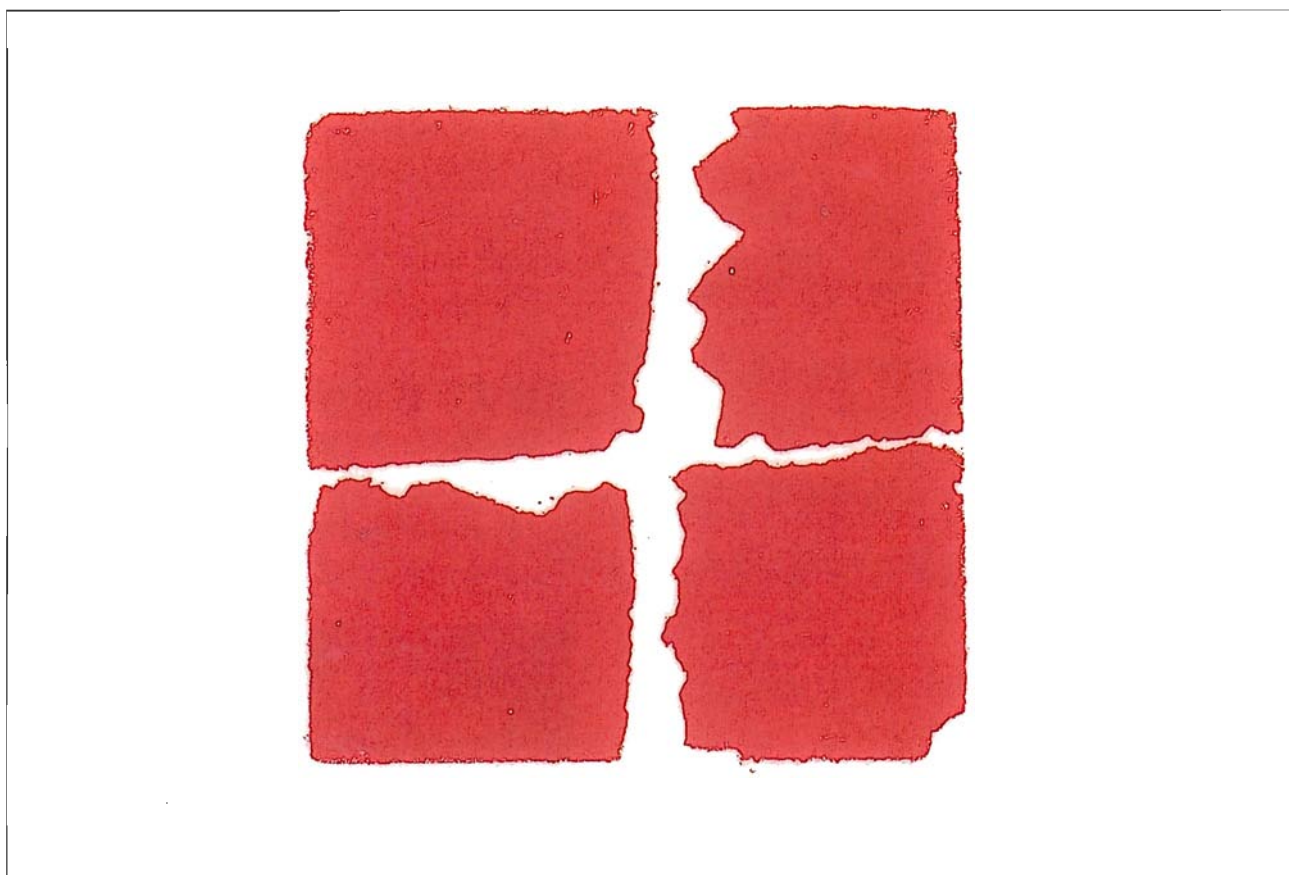
じんの ゆうじ
熊本大学助教授・天刻家



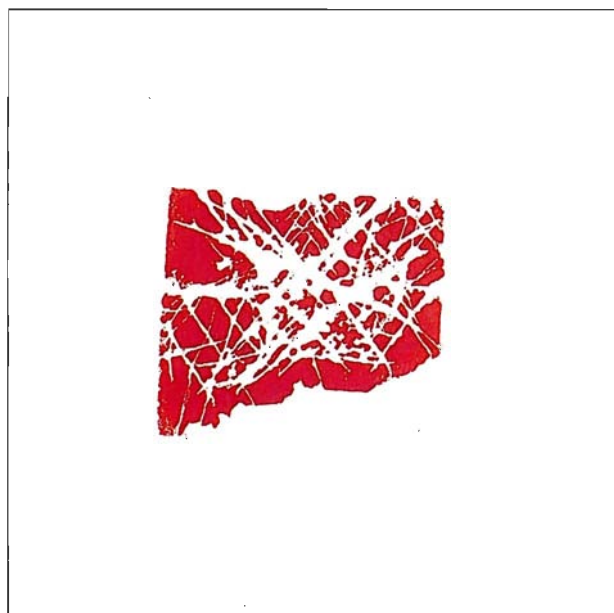
① 作品05-1 丙戌



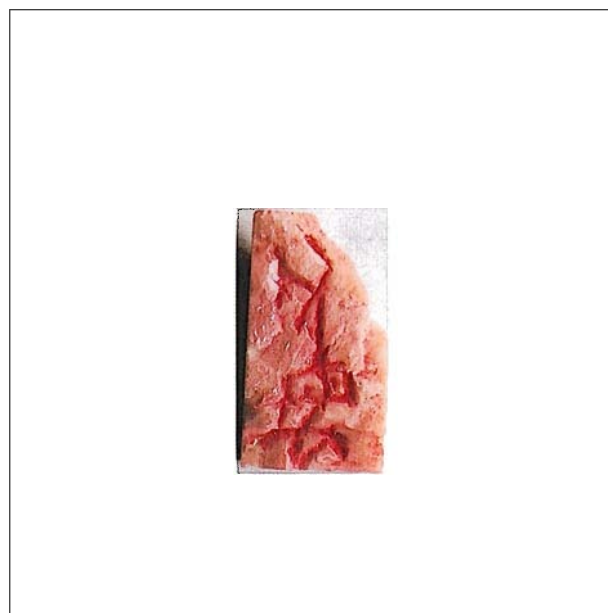
② 作品06-1 蠹魚



③作品06-2 非文字作品 (原寸30mm×30mm)



④作品06-3 非文字作品



⑤作品06-4 父母